

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。一部原文を省略したところや表記を変えたところがあります。

「私(えり子)は、「マコさん」といっしょに「ヨシエおばさん(マコさんの母親)」に会いに行った。「マコさん」が先に帰った後、も二人は話し続けた。

私がちひろのことを話している間、ヨシエおばさんはやつとスフレ^(おかし)に手をつけた。こげ茶色の山のとっぺんにスプーンをさしこむと、しゅるつと湯気があがった。

「仲をひきさかれたのが、さびしかったんじゃないの？」

「え？」

「だってあなたたち、ベルリラになりたかったんでしょ。」

「ベルリラ^(打楽器の名前)。」

「はいはいベルリラ。お友達^{たち}は指揮者になったあなたにシットしたんじゃないくて、いっしょにベルリラになれなかったさびしさを、あなたにぶつけたんじゃないかしら。」

「でも私のせいじゃない。」

「そうね。でもあまりにも」^①「に負えないことに直面すると、だれに感情をぶつけられればいいかわからなくなることってない？」

「うーん。」

「あやまってぶつけた感情は、自分にはねかえってくる。何倍にもふくらんでね。」

「そうかなあ。」

「そうですとも。えり子ちゃん、その子と仲なおりしたいんでしょ。」

「うん。でも今は無理。」

ヨシエおばさんは笑った。

「きつと相手の子も同じことを思ってるわ。無理なことは長つづきしない。親友どうしのケンカも、ダイエットも、それから田舎^{いなか}暮らしもね。私は三年目にギブアップ。パパさんとマコをおいて東京にもどったけど、正直せいせいしたわ。あの子はいまだに」^②「」にもってるみたいだけど……。ねえ、このスフレ、すごくおいしいわよ。食べて食べて。」

ヨシエおばさんは皿をさしだした。

「でも、」

「私はもうおなかいっぱい。おとしガンになって胃の半分をけずられちゃったから、ネズミのえさほどこしか食べられないの。さあ食べて。」

ヨシエおばさんは紅茶のカップを手にとった。

「この人も、ガンなんだ」

お母さんと同じ病気の人が、こんなに近くにもいたなんて。

そのとたん、ヨシエおばさんの明るさが、ガラス細工のようにきれいで、もういものに思えた。

私は満腹をこらえて、三皿目のデザートに挑んだ^{いど}。

③ ヨシエおばさんが私を見つめていたから、がんばって最後まで食べた。

チヨコ味のスフレは、ちよつぱりにがかった。

「ニューヨークに行ったらたくさん手紙を書けわ。あ、おばさんはパソコンとかメールとかそういうのはダメだから、パルプ〇〇%の紙でやりとりしましょう。もちろん再生紙も大歓迎^{かんげい}。むこうですてきなレターセットをさがすわ。だからえり子ちゃんもお手紙ちょうだいね。」

夕暮れのカイサツグチ。

天井の蛍光灯が、ヨシエおばさんの目じりのしわに深い影を作りだした。

「すてきな孫の顔が見られて本当にうれしかった。きつと神様からの老後のプレゼントだね。」

電車の音がきこえてきた。駅のおくから、なまあたたたかい風が吹きぬけてきた。

革の手袋をしたヨシエおばさんの両手が、私の頬をつつんだ。

「あなたはすなおない子ね。うちの娘を、マコをよろしくおねがいます。」

ヨシエおばさんは小さなおじぎをした。

「来年の秋にまた会おう。」

「はい。さようなら。」

ヨシエおばさんはブーツのソコを小気味よくならしながら、人ごみの中へ消えていった。

あざやかなあかね色に照らされた家々がならぶ住宅街を、私は軽い足どりで進んだ。

ヨシエおばさんはマコさんモードのマコさんを、ぎゅつとしぼって煮詰めたような人だった。④
と、心から思った。

燃えるような夕焼け。

あの空にいやなことをぜんぶくべて、灰にしよう。

今の気分をあさつてまで持続できたら、ちひろに声をかけられるような気がした。

私は大股で歩いた。あんなにたくさん食べたのに、おなかがすいてきた。

帰ったら、マコさんにやさしくしてあげようと思った。

(……………)

掲示板のまえをとおりましたとき、足がぱたりととまった。

あともどりして一歩、二歩、三歩。

「へんしつしや情報 たたいま(なたいまのテ)0.5人」

黒いペンで書きなぐったような数字。

(どういこと!?)

今朝はたしか0だったはず。それなのになぜ? いつのまに? もしかしてだれかのいたずら? でも……

あたりを見わたした。通りにはだれもいなかった。

③ カラスのムれが、したたる血の色にそまった空を横ぎっていく。遠くでうなる、消防車のサイレン。

⑤ 背筋がぞつとした。私ははじけとんだ。

夜のせまる住宅街をダッシュで走りぬけ、茶色いマンションの正面ドアをつきとばし、階段をかけあがり、転んでもはいあがり、三階のつきあたりのドアをあけると、私はドアにもたれかかって天井をあおいだ。

心臓が飛びだすくらい、ゲンカイまで走った。ひたいから汗がたらとしたり落ちた。毛玉コートがやけに重たい。

「おかえり。あらつ、どうしたの?」

ままははモードのマコさんが、私の肩をつかんだ。

「靴は? 片方どこにやったの?」

足元を見た。右足はスニーカー。左足は白い靴下。どこかで脱げたらしい。階段で足をすべらせたときかもしれない。

「なんで? なんでなの? まさかへんな人になにかされたんじゃない? やだやだ、どうしよう!」

マコさんは今にも泣きそうな顔で私の肩をゆすった。

「変質者、とうとうでたの？」

「でたっていうか……未遂よ未遂。」

「ミスイ？」

「さつきお買い物にでたら、近所の人たちがゴミおき場のまえで話しこんでたの。きいたら例の公園でね、若い男が砂場で遊んでいた子どもたちにむかってコートのをえをひろげたの。そしたら中はなんと、」

「なんと？」

「ハトだったのよ！」

「ハト？」

「コートの中からぱつと白いハトが飛びだして、その人、一礼するとどこかへ行ってしまったそうよ。こわいでしょう。ああ、おそろしい。」

「それだけ？」

「そうよ。」

「それって変質者じゃなくて手品師じゃないの？」

「うーん、たしかに微妙なラインね。でも万が一つてことがあるでしょう。あのととき気をつけておけば、なんてことにならないように、すぐさま掲示板に書いておいたわ。犯罪を未然にふせぐためにね。」

「書いたってあれ、マコさんだったの。」

0.5人。あれをマコさんが書いたとは……。

肩の力がどつとぬけた。死ぬほど走ったうえに靴までなくしたのに。

「もう本当に心配で心配で、だからすぐにうちの母の携帯に……はっ！」

マコさんが顔をあげた。

「ちよつとえり子ちゃん！うちの母は？」

「さつき駅で別れたよ。」

「じゃあ、駅から一人で帰ってきたの？」

私はうなずいた。

「平気だよ。たいした距離じゃないし。」

掲示板さえ見なかったら、私はさわやかな気分帰って来られたのだ。マコさんがよいなことをするから、このさまだ。

マコさんは目をまんまるにして、リビングヘダダッとかけこんだ。

いやな予感。私はマコさんを追いかけた。

マコさんは受話器をつかむなり、暗記済みの番号をプッシュした。

「もしもし。」

「もしもし、あらマコ！」

受話器からヨシエおばさんの大きな声がもれてきた。

「あれほど言ったのに、どうしてえり子ちゃんをうちまで送ってくれなかったんですかっ。去年変質者らしき人がでたこと、まえにお話したはずですけどっ！」

「あのへんは昔、タヌキがでるようなところだったんだけどねえ。」

ヨシエおばさんののきな声。マコさんの怒りが頂点に達した。

「タヌキじゃなくて変質者！なにかあったらどうするつもりなんですか。いつも、いつも、いつまでもいい加減なんだからっ！」

マコさんは、受話器を電話にたたきつけた。

ヒステリック(ひどくとりま)な声。他人行儀(たにぎょうぎ)な言葉づかい。

だんだん腹がたってきた。でかけるまえの気持ちがよみがえってきた。そもそもこの人は、私のうちでなにをしているんだろう。

私はリュックをだきしめて、マコさんをにらんだ。「ヨシエおばさんはわるくないよ。あんな言い方しなくてもいいじゃない。」マコさんが私を見た。ラクダの目^{マコさんの大きな目のたとえ}はおこっていた。

「私がどんなに心配したかわかっているの。ねえ、どうなの。」

そう言つてマコさんは私の二の腕^{うで}をつかんだ。ゲキツウ⁵が走った。

「いたいよ、はなして。」

「ルールのことおぼえてる？ 私とえりちゃんが最初にヤクソク⁶したこと。」

「だから、いたってば！」

「どこのおうちにも紙に書くことができるルールと、目に見えないルールがあるつて言つたよね。なにか気づいたときは、そのつど言おうつてやくそくしたよね。」

「はなせ！ はなせ！」

「なぜ言わないの。どうして言つてくれないの。」

「言えないっ！」

「なぜ？」

「言えないっ！」

「なぜっ！」

言いたいことはいっぱいあるのに、言葉がまとまらなかった。

圧力とコンラン⁷といったみの中で、私は必死に言葉をつなぎあわせようとした。ミカンの皮をはがすように、ひとつひとつよいいな言葉をとりぞいていったら、心の実が見えてきた。そのとたん、喉^{のど}から口にするりとあがつてきた。

「だってルールは私とお母さんの間にあるものだから、マコさんは関係ないんだよっ！ はやくはなせっ！」

私は腰を思いきりひねつてリュックをふった。マコさんの手ははなれた瞬間^{しゆんかん}、電話の横の水槽^{すいそう}がぐらりとかたむいて、津波^{つなみ}のような水しぶきがあがつた。

「ああっ！」

マコさんは落下する水槽をうけとめようと両手をのばした。私の肩にマコさんの頬があたつた。まとめた髪^{かみ}がほどけ、眼鏡がふっとんだ。

私は見た。

ままはモードからマコさんモードにかわる瞬間を。

事態はものすごいスピードでおきているのに、スローモーションで見えた。

ガッシャーんっ！

ガラスの破片^{はへん}と水が床^{ゆか}に飛びちった。デメキンのキンさんがキンさんのどちらかが、水たまりの中でびしゃびしゃはねていた。

「やだっ、どうしよう！」

マコさんは、キンさんがキンさんのどちらかを手のひらにのせると、あわててテレビの横のブー・フー・ウー^{ここでは金魚の名前}の水槽に避難^{ひなん}させた。

「ギン！ ギンはどこなの！」

ギンは私の足元にいた。ガラスの板のしたで、尾びれを弱々しく動かしていた。

マコさんは板をもちあげて、手のひらにギンをのせた。ギンはもう動かなかった。

部屋に充満^{じゆうまん}する、凍りついた空気^{くわい}。

マコさんはひざを床につけて、祈^{いの}るような姿で手のひらのギンを見つめていた。

かすれた声が、しんとした室内にひびいた。

「母は昔からああいう人でね、友達がうちに来ると、自分のぶんのケーキまでお盆ぼんにのせて私の部屋にはいるの。そうして好きな男の子のことをたずねたり、私のヨウフクを着てでかけてみたり、それから生理のことをきいてきたり……。それが私、とってもイヤだった。きつと母は私と友達みたいな関係になりたかったんだと思う。」

マコさんの朱色のスカートが床にひろがった水をスすいあげていく。そこだけシミのように色が濃こくなった。

「だから私、決めたの。もしも自分に子どもができたらしつかり母親をするって。『友達みたいな』は、フルーツパフェのサクランボみたいに、あとからつけねばいいって。でも私、母親のつもりになつていただけなのね。母親がなんなのか、わかつてないくせに、理想ばかり求めていたんだわ。ああ死んじやった。」

マコさんは小指でデメキンのおなかをさわった。

⑧ 長いまつげが、雨にぬれた朝顔のようにしんなりしていた。

私は罪を犯した。

罪状は殺人、ではなく殺魚。

私は毎日のように魚を食べている。

殺された魚を、せかい中の人が食べている。

そう思つて自分をなぐさめようとするけれど、胸のいたみは消えない。

食べる魚と、だれかが愛している魚は、やっぱりちがう。

大切なものをうばうのはいけないことだ。

たとえそれがマコさんのものであつたとしても。

つめたいシャツと羽毛布団の間にはさまれて、天井を見つめた。

あるとき。

うすぐらい中庭のベンチで、大久保先生は言った。

やめたいなんて言つてはダメ。あなただけがたいへんなんじゃない。神様は喜びも苦しみもすべての人に公平にわけあたえる。

だから今、このときを乗りこえてこそ、りつばな指揮者になれるのだ、と。

輪郭のぼんやりした大久保先生の顔。

でもその声から、私に懸命にうったえていることが伝わつて胸が熱くなった。

感動したんじゃない。むかついたからだ。

先生のお説教は低学年用で、五年生のためのものじゃなかった。

世の中は不公平だ。

金持ちとまずしい人がいて、頭の良い人と悪い人がいて、美人とブスがいて、そして助かる人と助からない人がいる。不公平だつてこと、そんなの、五年生ならだれでも知っているんだ。

あたえられるシレンの量は人それぞれだけど、それでも乗りこえなければいけない。

いさぎよくそう言つてくれたなら、⑨ いつわりの希望をもたないぶんだけ、せいせいした。

三年生の夏休み。終戦記念日の午後。

私の誕生日をお母さんの病室で祝つてもらつた。

いつもはケンオン表や桃の絵がらの湯のみがおかれた細長いテーブルに、五号サイズのショートケーキがのつていた。それは、これまでにかざられたどんな花よりもかがやいていた。

お父さんとお母さんが歌うハッピーバースデーの歌。ベッドの横の大きな窓からさしこむ光のせいで、二人の顔は半分影になつてぬりつぶされていた。

歌いおえたタイミングにあわせて、私は消毒液のにおいをふくんだ空気を胸いっぱいすいこんだ。ケーキのうえの九本のロウソクの火は、いつべんに消えた。

そのころのお母さんは、腕から注入される点滴を^{てんてき}ごはんがわりにしていた。口からはなにも食べられなかった。でもあの日、お母さんはサンソマスクをはずして、私がさしだしたフォークのうえのホイップクリームをほんのすこし、口にした。そのとき私は、お母さんの病気はきつとなおると、まっすぐに思った。

ただどその日の夜、お父さんはテーブルで泣いていた。両手をひざのうえにおいて、したたり落ちる涙をぬぐうことさえしなかった。

「えり子きいてくれ。お母さんはもうすぐ死ぬんだって。秋までもたないんだって。」

そう言ってお父さんはテーブルにつぶした。

ザワツ、ザワリ……

どこからともなく不気味なカタマリがやってきた。どろりとした灰色のその物体は、つまさきからはいあがつてきて私の全身をおおった。お父さんの姿はかすみ、部屋にあふれた観葉植物たちは、急に色を失った。

手をのばしても、泣きさけんでもどうにもならない、とりかえしのつかないことがおころうとしていた。

お母さんの声がきこえなくなる。姿が見えなくなる。

私はあどすさりした。アメーバのような物体は、はらつてもはらつても私からはなれなかった。

それは、あとにもさきにも感じたことのない、完璧な恐怖だった。

それでも、私はたたかった。

すてきな誕生日をすごしたその夜に、とんでもないことを言いだしたお父さんの背中をなでながら「大丈夫、大丈夫。」と子守歌のようにくりかえした。

思えばお父さんの欠点はタイミングがわるいということを、あのとき知ったのかもしれない。

本当は私がなくさめてもらいたかった。大丈夫だよ、とだれかに言ってもらいたかった。

世の中は不公平だ。

でも、そうでもないよ、と思いたい自分がいる。

それでもやっぱり、どうしようもないほど不公平なのだ。

天井の照明が二重三重になって、やがて形のない模様になった。あのとき、恐怖のおくにおしこめた涙が、今になってできた。こめかみに涙がつたい、枕がしめつていく。

私は布団を頭までひっぱりあげて、あのときのお父さんのように声をあげて泣いた。

だから、玄関のドアがあく音を、私はききのがしてしまった。

朝おきると、マコさんはいなかった。

テーブルにおき手紙があった。

海に帰ります

うすいグリーンの紙に、黒のボールペンで書かれた六文字。

理解するのにはしばらくかった。でも具体的なことがわかったわけではなく、気づかなくてはならない一点を箸の先でつまんだようなもの。

マコさんは家をでていった。ただそれだけ。そういうことだ。

「おはよう。」

テレビの横の水槽のまえにお父さんがいた。こすりあわせた親指とひとさし指の間から茶色いつぶがはらはらと水に落ちた。赤と白の金魚にまぎって、デメキンのキンさんが水面に近づいて口をばくばくさせた。

ふりむくと、電話の横にぼっかり空間があった。

かつて水槽があつた場所。

今はもう、ない。

胸に苦いものがこみあげてきた。

「ギンさんはベランダのコスモスの花壇にうめたつて。」

お父さんの背中が言つた。私をセめて¹³いるふうでも、悲しんでいるふうでもなく。

「お父さん、これ見た？」

お父さんはたちあがると、テーブルに目をやった。

「ああ見たよ。」

そつけない返事をして、こんどは仏壇の横の、らんちゅう(金魚)の水槽にエサをはなつた。お父さんにとっては、マコさんより金

魚のほうが大事みたいだった。

「海ってどこかな。」

「どこかなあ。」

「与那国島？」(沖縄県の島の一つ。以前旅行を計画していた)

「さあ。」

「お父さん、知らないの？」

「知らないよ。」

「じゃあ心配してないの？」

お父さんは私を見た。

「えり子はどうなんだよ。」

「……………」

あせりや罪悪感はない。だからといってせいせいした気分もない。青い果実をかじつたような、すっぱさとほのかな甘み、そしてあとからじわりとこみあげてくるしぶみを、私は味わっていた。

《その後、二人はもくもくと昼食をとつた。》

⑫「一年生のときの自分がどんなだったかおぼえてるか。」

私は顔をあげた。お父さんの皿は、すでにからっぽだった。

一年生といえば入学式。つやつやのランドセル。新しい教科書。いろんなところに書かれた名前。同じ紺色のブレザーを着た、見しらぬクラスメイトたち。黄色い交通安全バッジ。それからはいじめての給食……。

上級生が大きくてこわかったあのころを私は思い浮かべた。

「入学式の時、えり子は自分の席が見つからなくて、ハンベソかいたよなあ。それから遠足のまえの晩にコウフン¹⁴しすぎて熱がでたこともあつた。おぼえてるかい。」

朝礼前の校庭の風景。

一年生は本当に小さくて、かわいくて、すなおで、生意気で、そしてよく転ぶ。

「一年生はアンバランスなんだよな。なにもかも新しいことばかりで、思うように行動できない。気持ちをコントロールするのにもずかしい。そうじゃなかった？」

「……………」

今も気持ちは上手にコントロールできない。

「そんな一年生に、えり子はどうする。失敗をせめる？ それとも助ける？」

「なくさめて丁寧に教えてあげるよ。」

「だよな。お父さんは、マコさんは新入生みたいなものだと思うんだよ。ぴかぴかのお母さん一年生。」

私はお父さんの言葉をくりかえした。

「おかあさんいちねんせい。」

「ああ。しかも超飛び級のね。おなががスイカみたいにくれる感覚とか、予防セツシユ¹⁵にはどんな種類があつていつごろ受けるのかとか、通信簿の返信欄にはどんなことを書けばいいのかとか、そういうことをまったく知らない人が突然お母さんになったんだからね。しかも十一歳の子どものお母さんだ。これって、よく考えるとんでもないことだよな。」

「でも、そのとんでもないことが現実におきてしまったじゃない。しかもうちで。」

「そう、うちで。」

「なんでそんなこと言うの。」

「マコさんがきらいか。」

「わからない。」

⑬ もう私にはわからなかった。いけばうつとうしいし、いなければ気になる。好きとかきらいとか、そんな言葉であらわせるほど、単純な関係ではなくなってしまった。

(「タイドプール」長江優子)

問1 線部1〜15のカタカナの部分の漢字に直しなさい。

問2 線部①「」に負えない(2ページ)・②「」にもつてる(3ページ)の、それぞれの「」にあてはまる漢字一字を書きなさい。

問3 線部③「チョコ味のスフレは、ちよつぷりにがかった」(3ページ)とありますが、それはなぜですか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア ヨシエおばさんが、お母さんと同じ病氣になつていたことを知つてつらかつたから。
- イ ヨシエおばさんの明るさは、病氣の苦しさを気づかれないための演技だと知つたから。
- ウ チョコ味のスフレの量が多すぎて、えり子が全部食べるのは大変だったから。
- エ ヨシエおばさんの目が、えり子の人が見えわめようとしてるように感じられたから。
- オ チョコ味のスフレは、死んだお母さんを思い出させるような悲しい味だったから。

問4 線部a「小氣味よく」(4ページ)・b「凍りついた空氣」(9ページ)・c「まっすぐに」(12ページ)のここでの意味として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

a		b		c	
ア	引きしまつて力強く	ア	身の毛もよだつようなさま	ア	ひどく
イ	足早に調子よく	イ	すべてが止まつてしまつたようなさま	イ	なんとなく
ウ	あざやかに気持ちよく	ウ	途方に暮れているようなさま	ウ	わけもなく
エ	ゆつたりとほどよく	エ	悲しみにうちひしがれているようなさま	エ	むやみに
オ	こきざみな音を立てて	オ	弱り切っているさま	オ	すなおに

問5 線部④「ヨシエおばさんに会つてよかったと、心から思つた」(4ページ)とありますが、「ヨシエおばさん」とはどのような人ですか。3ページの15行目までの内容をふまえて、五十字以内で説明しなさい。

問6 — 線部⑤「背筋がぞつとした。私ははじけとんだ」(5ページ)ときの「私」の気持ちを説明したものとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 今朝は0人だった「へんしつしゃ情報」がいつの間にか0.5人に増えていて不気味に思っている。
イ 血の色にそまつた空を横ぎるカラスが不気味に感じられ、一刻も早く帰らなければとあせっている。
ウ 変質者が現れてもおかしくなく、こわい思いを味わうかもしれないスリルに気持ちが高ぶっている。
エ 消防車のサイレンをきいて、家で何か起こったのではないかと思ひ急に不安にかられている。
オ 変質者が現れそうな状況に置かれている自分に気づき、急におそろしきにとらわれている。

問7 — 線部⑥「マコさんがよけいなことをするから、このさまだ」(7ページ)とありますが、「よけいなこと」とはどのようなことですか。三十文字以内で説明しなさい。

問8 — 線部⑦「他人行儀な言葉づかい」(7ページ)とありますが、直前の——線部ア〜オのうち、それにあてはまらないものをすべて選び、記号で答えなさい。

ア 「あれほど言ったのに、どうしてえりちゃんをうちまで送ってくれなかったんですか?」
イ 「去年変質者らしき人がでたこと、まえにお話ししたはずですけど!」
ウ 「タヌキじゃなくて変質者!」
エ 「なにかあつたらどうするつもりなんですか。」
オ 「いつも、いつも、いつまでたつてもいい加減なんだから!」

問9 — 線部⑧「長いまつげが、雨にぬれた朝顔のようにしんなりしていた」(10ページ)とありますが、この時の「マコさん」の気持ちを八十文字以上百文字以内で説明しなさい。

問10 — 線部⑨「いつわりの希望」(11ページ)とありますが、この場合の「希望」はどんな考えから生まれるのですか。その考えを表している三十文字以内の一文をぬき出し、最初の三字を書きなさい。

問11 — 線部⑩「不気味なかたまり」(12ページ)とは何ですか。わかりやすく三十文字以内で説明しなさい。

問12 — 線部⑪「苦いもの」(14ページ)とありますが、ここでの「えり子」の気持ちとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 水槽を壊してしまったことに対する腹立たしさ
イ マコさんが私のせいで家を出てしまった悲しさ
ウ お父さんにしかられるのではないかという不安
エ マコさんの大切な金魚を殺してしまったつらさ
オ 私をせめないお父さんに対するもうしわけなさ

問13 — 線部⑫「一年生のときの自分がどんなだったかおぼえてるか」(15ページ)とありますが、「お父さん」は「えり子」にどのようなことに気づいてほしいと思つていますか。五十文字以内で説明しなさい。

問14 — 線部⑬「もう私にはわからなかった。いればうつとうしいし、いなければ気になる。好きとかきらいとか、そんな言葉であらわせるほど、単純な関係ではなくなつてしまった」(16ページ)とありますが、「私」はマコさんにどのようなであつてほしいと思つていますか。その理由もふくめて、わかりやすく七十文字以上九十文字以内で説明しなさい。

受験番号	
国	語

問 1		
11	6	1
12	7	2
13	8	3
14	9	4
15	10	5

問 2	①
	②
問 3	
問 4	a
	b
	c

[illegible]

問
6

問 7

問 8

[illegible]

問
10

問 11

問
12

問
13

[illegible]